

# 第6講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

① いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目覚むる心ちすれ。

そのわたり、ここかしこ見歩き、<sup>②</sup>ゐなかびたる所、山里などは、いと目なれぬことのみぞ多かる。

都へ便求めて文やり、「そのこと、かのことかの便宜に忘るな」など言

ひやりたるこそをかしけれ。<sup>④</sup>

⑤ さやうの所にてこそ、万に心づかひせられ、持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしと見ゆれ。

寺、社などに忍びて籠りたるも、をかし。

(『徒然草』より第十五段)

(現代語訳)

どこでもよい、しばらくよそで泊まったりするのこそ、目が覚めるよ  
うな  心地がするものだ。<sup>⑦</sup>

そのあたり、ここあそこを見て回り、ひなびたところ、山里などは、  
たいそう見なれないことが多くあるものだ。

都へつてをさがしては手紙を送り、「そのこと、あのことあのついでに  
忘れないように」などと言いつ送るのは趣がある。

そんなところでこそ、万事につけ自然に気づかひされ、持っている道  
具類まで、上等な物は上等に、技芸の才能のある人、器量のいい人も、  
ふだんよりは見事だと感じられる。

寺や神社などに人目を避けて泊まって祈念するのも、趣がある。

問一 「徒然草」の作者を次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 清少納言 イ 吉田兼好

ウ 紫式部 エ 松尾芭蕉

問二 線①「いづく」、②「ゐなかびたる」、③「さやう」の読み方

を現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

① \_\_\_\_\_ ② \_\_\_\_\_

⑤ \_\_\_\_\_

問三 線③「文」、④「をかしけれ」、⑥「かたち」の意味を現代語

訳の中から書き抜きなさい。

③ \_\_\_\_\_ ④ \_\_\_\_\_

⑥ \_\_\_\_\_

問四  にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選

び、記号で答えなさい。

ア 恥ずかしい イ 退屈な

ウ おそろしい エ 新鮮な

問五 線⑦「ひなびたところ、山里など」とありますが、筆者はふ

だんはどこにいますか。現代語訳の中から書き抜きなさい。

2 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも今は昔、南京の永超僧都は、魚なきがきは、時、非時もすべて食はざりける人なり。公請つとめて、在京のあひだ、ひさしくなりて、魚を食はで、くづほれてくだるあひだ、奈島の丈六堂の辺にて、昼破子食ふに、弟子一人、近辺の在家にて、魚をこひてすすめたりけり。

① 件の魚のぬし、後には夢に見るやう、おそろしげなる物ども、その辺の在家をしるしけるに、我家をしるしのぞきければ、たづぬる処に、使のいはく、

「永超僧都に魚たてまつる所也。さて、しるしのぞく」といふ。

その年、この村の在家、ことごとく、えやみをして、死ぬるものおほかり。此魚のぬしが家、ただ一字、その事をまぬかる。よりに僧都のものとへ参りむかひて、このよしを申。僧都、此よしを聞て、かげ物一重、たびてぞかへされける。

(現代語訳)

これも [ ]、南の京(奈良)の永超僧都は、魚がない限りは、

午前の食事、午後食事すべて食べなかつた人である。朝廷の法会の講師を務めて京都にいる期間が長くなって、魚を食べないで衰弱して戻る途中、奈島の丈六堂のあたりで、昼食の弁当を食べるときに、弟子の一人が、近くにある家で、魚を求め勧めた。

その魚の主がのちに夢に見ることに、おそろしげな者どもが、そのあたりの家に印をつけたのに、自分の家に印をつけなかつたので、尋ねたところ、使いが言うことには、

「永超僧都に魚を献上したところである。そういうわけで、印をつけな

い」と言う。

10

5

この魚の主の家は、ただ一軒そのことをまぬがれた。それで僧都のもとに参上して、この事情を申し上げた。僧都はそのいきさつを聞いて、ほうびを一着お与えになつて、帰された。

問一 — 線①「すすめたりけり」とありますが、だれに何を勧めたのですか。次の [ ] にあてはまる言葉を文中から書き抜きなさい。

[ ] に、献上された [ ] を勧めた。

問二 — 線②「夢に見るやう」とありますが、夢に見た内容が書かれているのはどこまでですか。古文中から終わりの五字を書き抜きなさい。

[ ]

問三 — [ ] にあてはまる言葉を書きなさい。

[ ]

問四 — 線③「そのこと」とは、どんなことですか。

問五 この文章の内容に合うものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 永超僧都に魚を献上した主は、僧都を悪い者どもから守った。
イ 永超僧都に魚を献上した主は、僧都に代償を求めた。
ウ 永超僧都に魚を献上した家には、大変よいことが起きた。
エ 永超僧都に魚を献上した家には、僧都のところから使いがきた。

[ ]

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

かぐや姫のうわさを聞いて、多くの男が求婚にやってきましたが、姿を見ることもできない。

人の物ともせぬ所にまどひありけども、なにの験あるべくも見えず。

家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかかれども、ことどもせず。あたりをはなれぬ君達、夜をあかし、日をくらす、多かり。おろかなる人は、「用なきありきは、よしなかりけり」とて、来ず成にけり。

其中に、なほ言ひけるは、色好みといはるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来ける、その名ども、石作の御子・くらもちの皇子・右大臣阿倍のみむらじ・大納言大伴の御行・中納言石上の麻呂足、此人々なりけり。

世中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物もくはず思ひつつ、かの家に行きて、たたずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず。わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月・師走の降りこほり、水無月の照りはたたくにも、障らず来たり。

この人々、ある時は、竹取をよび出て、「娘を、吾に賜べ」とふし拝み、手をすりのたまへど、

「をのが生さぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日過ぐす。かかれば、この人々、家にかへりて、物を思ひ、

祈りをし、願を立つ。思、やむべくもあらず。「さりとも、つひにをどこ婚はせざらむやは」と思ひて、頼みをかけたり。あながちに、心ざしを

見えありく。

(『竹取物語』)

- \*1 まどひありけども || さまよい歩いたが。
- \*2 君達 || 貴公子たち。
- \*3 おろかなる人 || あまり熱心でない人たち。
- \*4 用なきありきは、よしなかりけり || 無用の歩き回りは無駄だった。
- \*5 言ひけるは || 言い寄ったのは。
- \*6 色好み || 恋の道の達人。
- \*7 見まほしうする || 妻にしたいと思う。
- \*8 たたずみありきけれど || あちこち場所を変えて立ちつくすが。
- \*9 わび歌 || 思いの苦しさを訴える歌。
- \*10 降りこほり || 雪が降り氷がはるときにも。
- \*11 照りはたたくにも || 太陽が照りつけ雷が鳴りひらめくのものにも。
- \*12 賜べ || ください。
- \*13 心にも従はずなんある || 私の意見にも従わないでいるのです。
- \*14 つひに || 最後まで。
- \*15 婚はせざらむやは || 結婚させないことがあるうか。
- \*16 あながちに || 無理算段をして。
- \*17 心ざしを見えありく || 思いの深さを見せつけるように歩き回る。

問一 線A「なほ言ひけるは」、B「見まほしうて」、C「のたまへど」の読み方を現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

A

C

B

問二

線 a 「こととせす」、b 「返事もせず」、c 「来たり」、d 「言ひて」の動作主として最も適当なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 求婚者たち
- イ 竹取の家の人たち
- ウ 竹取
- エ かぐや姫

a

b

c

d

問三

線①「だに」は、軽いものを挙げて、より重いものを類推させる言葉ですが、ここで(1)軽いもの、(2)重いものとは、それぞれ何ですか。現代語で書きなさい。

(1)

(2)

問四

線②「かひ」と同じことを意味する言葉をここより前の文中から一字で探し、書き抜きなさい。

問五

線③「霜月」、④「師走」、⑤「水無月」は、それぞれ陰暦の何月ですか。

③

④

⑤

問六

この古文を現代語訳する際に、線⑥「月日」、⑦「この人々」、⑧「を」ところのあとに助詞を補うとわかりやすくなります。それぞれ適当なひらがな一字で答えなさい。

⑥

⑦

⑧

問七

線⑨「あながちに、心ざしを見えありく」とありますが、これは何をしているのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 腹を立てて、怒りをぶつけている。
- イ 望みを捨てないで、自分を売り込んでいる。
- ウ 思いを断ち切つて、別れのあいさつをしている。
- エ 苦しみが高じて、自分を辱めようとしている。

問八

次のうち、この文章の内容と合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 竹取は、貴公子たちの思いがどの程度のものであるか、確かめようとした。
- イ かぐや姫は、家の人たちを通じて、貴公子たちの求婚をすべて断つた。
- ウ 貴公子たちはなかなかかぐや姫に会えず、代表者五人を送り込むことにした。
- エ 貴公子たちはさまざまな手を使ってかぐや姫に近づこうとしたが、だれも成功しなかった。